



学校名：長野県中野市立倭小学校

氏名：松井真由美

[担当教科：小学校全教科]

- 実践教科等：総合的な学習の時間
- 時間数：10 時間
- 対象生徒：小学校5年生
- 対象人数：9人（全校 46 人）

1 単元名

明日をつくるわたしたち

2 単元の目標

- 世界の多様な文化・生活を知り、自分と同じところや違うところに気づき、外国の人々や文化への理解を深める。（進んで参加する態度）（コミュニケーションを行う力）
- 環境問題や開発途上国の様子、日本の国際協力について聞いたり調べたりすることを通して、地球はつながっていることを理解し、これからの自分に生かしたいことや今の自分にできることを考え、行動しようとする。（つながりを尊重する態度）（他者と協力する態度）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・世界には様々な文化があることに気づく。【多様性】
- ・環境問題は地球上で全てつながっており、私たちの生活は、世界の国々とお互いに協力し合うことで成り立っていることに気づく。【相互性】
- ・国際社会の平和と発展や環境の保全には、一人一人が国際社会の一員として、自分たちにできることを実践していくことが大切であることに気づく。【連携性・責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

本校は 11 月に「なかよし(人権)旬間」が設定されている。この機会に国際理解を目的とした全校集会を開き、私がモンゴルで体験したことや、出会った人を紹介することで、外国に興味を持てるようにする。その際、同じ小学生が馬に乗っていることなどを紹介することで、「自分と似ている人・自分と違う人—みんなちがってみんないい—」と様々な環境や文化背景があることを理解し、その違いや良さを受け入れることができると考える。そして、日本が行っている国際協力(資金面・技術・人)を紹介することで、その意義について考え、自分自身の行動や生き方についても考えを広げたい。

「子ども環境白書」「ESD クエスト」で、世界で起こっている環境問題について一人一人の興味に合わせて調べる活動を行うことで、さらに理解を深められるだろう。そして、実際に海外協力隊等を経験した方のお話を聞くことで、国際協力を身近なことと感じ、自分にもできることを考えさせたい。情報教育と合わせ、学んだことをパソコンで新聞にすることで、多くの人に伝える活動へと広げ、自分にできることを少しでも行動へとつなげていきたいと考える。

(2)児童観

5年生の子どもたちは、10 月の音楽会でクラス合唱曲として「平和の鐘」を選び、戦争やその歌詞の意味について考え合い、だれもが「外国の人ともなかよくしたい」という気持ちを持っている。幼少期から同じメンバーで過ごしており、仲がよいという良さがある反面、人間関係が固定化しており、深く考えずに発言力のある子の行動に流されている面もある。小規模校であるため、様々な個性を持った子や多様な考えに触れていないという面もある。様々な人と触れ合える他校との交流活動を楽しみにしている面もあるが、慣れ親しんだ人間関係の中で安心して過ごしたいという気持ちも感じる。また、テレビでの情報から「〇〇人は〇〇だ」など、安易に一方的な情報を鵜呑みにしている面もある。

子どもたちを育む中野市は、「えのきだけ」の生産が日本一である。子どもたちは昨年4年生の時、えのき栽培工場を見学した。その際、工場には東南アジアや中国からの研修生が働いていることを知

った。また、えのきの機械を製造している工場に行った際には、作られた機械は主に中国などの外国へ輸出されることを知り、驚いていた。海外とのつながりが希薄であると思われる地域に育つ子どもたちではあるが、様々な形で諸外国との関わりがあり、今後その傾向はますます増えていくことが予想される。

(3) 指導観

○イメージしやすいようにパワーポイントで写真や動画を提示したり、音楽を流したり、試飲したり、実物を触ってみたり等と、可能な限り五感で感じられるようにしていきたい。

○「どうしてだろう?」「なぜだろう?」と子どもたちが疑問を持ち、自ら考えたいくなるような課題を設定し、考えたことを友だちと伝え合うことで考えを深められるようにしていきたい。

○「これからの未来を創っていくのは自分たちであり、(行動しだいで)未来はどのようにでも創られる」と子どもたちが、明るい未来をイメージし、前向きな気持ちで「自分のできることをやってみよう」と思えるように進めたい。

5 評価規準

評価の観点	A 学習方法		B 自分自身	C 他者や社会
	情報を収集し、分析する	相手や目的に応じてまとめ、表現する	意志決定	他者と協同して、課題解決する
具体的評価規準	進んで本を見たり、データを読み取ったり、質問したりして、世界の様子について調べている。	学習してわかったことや知らせたいことをまとめ、周りに伝えている。	世界の様子に関心を持ち、自分のできることしようとしている。	友と協力して、自分たちにできることを考え、広め、実行しようとしている。
評価方法	ワークシート	発言・ワークシート 新聞づくり	発言・ワークシート 新聞づくり	発言・話し合いの様子

6 単元の構成

時間	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	行ってみたい国を調べよう (5年)	・行ってみたい国の生活の様子を調べることで、世界には様々な国があることを知る。	・行ってみたい国が人によって違うことを知り、その国の生活を本やネットで調べること、自分の生活との違いに気づく。
2	モンゴルの暮らしについて知ろう (全校集会)	・モンゴルの暮らし(衣食住)や小学生の様子を知り、日本との違いやその良さを知る。 ・日本がモンゴルの小学校を建てるために、お金を出したりお手伝いしたりしたことを知る。	・モンゴルの音楽、民族衣装、日本とのつながり(相撲)について知る。 ・モンゴルの食べ物(スーティツアイ)試飲。 ・モンゴルの小学生の草原での暮らし、草原に学校がないこと、日本からの小学校建設無償資金協力について知る。
3	どうして日本は無償でモンゴルの小学校を建てたのか考えよう (4・5・6年)	・日本の無償資金協力について考えることを通して、世界は関わり合い、つながり合っていることに気づく。	・班の中で意見交換したり、他学年の考えを知ったりしながら様々な考えに触れ、日本も戦後や震災の際には援助を受けたことを知り、自分の考えを深める。
4	こども環境白書から学ぼう (5年)	・こども環境白書からESDについて知り、世界はつながっていることや環境問題について関心を高める。	・こども環境白書から、ESDの考え方を知り、興味のある地球環境問題を調べる。
5	ESDを考えよう (ESDクエスト) (5年)	・地球環境や開発途上国の問題について知り、ESDの大切さを知る。	・教材「ESDクエスト」を提示しながら、地球環境や開発途上国の抱えている問題について知る。
6	モンゴルで活躍する日本人 (5年)	・様々な分野で活動している日本人がいることを知り、国際協力に携わっている方々の想いについて考える。	・モンゴルで国際協力活動をしている日本人について知り、インタビュー画像等をみながら、その方々の想いについて考える。
7	国際協力を経験した方から学ぼう (4・5・6年)	・実際に国際協力活動を経験した方のお話を聞き、日本とは違った文化や様々な国際	・外部講師による青年海外協力隊(ブータン美術教師)やNPO(南スーダンでの学校建設)の経験者の話を聞き、その国の

		協力の形があることを知る。	文化や国際協力の実際について知る。
8	私たちにできること (5年)	・みんなに伝えたいこと、自分が できることについて考える。	・学んだことをまとめ、意見交流し、自分た ちができることについて考える。
9	新聞づくり (5年)	・今、自分ができると、伝えたい ことを新聞にして、広める。	・パソコンを利用して新聞を作成し、伝える ことで、自分にできることを考えていく。
10	私たちにできること 一気持ちを 届けよう (5年)	・お金を必要としている人はたく さんいるけれど、どの分野に 気持ちを届けるのか話し合 う。	・自分たちのお金(お米の売上金)の一部 をどのように使うのか、話し合う。

7 授業事例の紹介

小単元名【モンゴルで活躍する日本人】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月20日(金)第2限

(イ)実施会場 5年教室

(ウ)本時の目標

青年海外協力隊員などのモンゴルで活動する日本人について知り、どうして海外で活躍しようと思ったのか考えることを通して、人と人との国際協力の意義について考える。

(エ)指導のポイント

- ・子ども同士が顔を合わせて話し合えるように班ごと一枚の写真を用意したり、一斉に話し合えるように画像や動画をパワーポイントで提示したりする。
- ・活動している隊員の姿を伝えることで、自分の生き方(キャリア)を考えることにつなげたい。

(オ)本時の展開

過程・ 時間	指導内容	学習活動	指導 形態	指 導 上 の 留 意 点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	1 ESDとは何か？ (前時の復習)	○「世界や次の時代の人のことも考え、毎日の暮らしの中で考え・学び・気づくことの大切さ」を思い出す。	班	・こども環境白書2015を手元に置き、いつでも見られるようにしておく。	○ESDについて理解しているか。(発言)
展開 30分	2 モンゴルで活躍する日本人について知る。	○フォトランゲージ1 [バレーボール指導写真] ・写真から、気づいたことを話し合う。 ・だれが日本人か予想する。		・自由に発想するように促す。 ・どうしてそう思ったのか理由も伝えるようにする。	
	学習問題: モンゴルで活躍する日本人について知ろう				
	学習課題: どうして海外で活躍しようと思ったのか、考えよう				
	バレーボール指導河村隊員 青年海外協力隊とは？ チームで行う新空港工事 障害児支援の吉田隊員 環境問題に取り組む横山隊員 馬の病気の研究に関わる井上教授	○パワーポイントの画像やVTRを見ながら、人や活動について知る。 	一斉	・予想しながら、考えるように促す。	○友だちの考えを聞き、自分の考えを伝え合っているか。(話し合いの様子)
まとめ	3 まとめ	○ワークシートに記入し、感想を発表する。			○人と人との国際協力の意義を考えるこ

10分		○これからの自分に生かしたいことを考える。			とができたか。 (発言・ワークシート)
-----	--	-----------------------	--	--	------------------------

(2) 授業の振り返り

〔よかった点〕

- ・フォトランゲージでは、「日本じゃないね」「モンゴルの学校？」「バレーボール？」「教えているの？」等、児童が気づいたことを班で伝え合い、どういう場面なのかを予想し、考えを深める姿が見られた。その後、気づいたことをクラス全体に発表することで、より興味を持って学習に参加することができた。
- ・教師自身がモンゴルの女子高生と一緒にバレーボールをしている姿を動画で示したことで、より興味を持てたようだ。
- ・実際の画像や動画を見ることで、様々な分野での協力の現場があることの理解につながった。
- ・協力隊の方々の生の言葉を聞くことができ、その言葉の意味を考えることで、考えを深めることができた。

〔課題〕

- ・「どうして海外で活躍しようと思ったのか」と考えることは、モンゴルや海外の様子を知っていないと5年生では難しい課題であると感じた。背景を学んでいくことの大切さを感じた。

(3) 使用教材

① フォトランゲージで使用した写真



② 使用したスライド(抜粋)



③本時：ワークシート

明日をつくる私たち 「モンゴルで出会った日本人」

11月20日(金) 5 年 名前

1. モンゴルで活躍する日本人の話を聞いて
心に残ったこと

モンゴルで新国際空港
の工事で、設計をする人
が日本人で、工事を進める人が韓国で、工事
をやる人がモンゴルで協力してやっていることを
聞いてすごいなと思いました。



2. 「モンゴルを助けることは、日本のためにも世界のためにも役立つ」とは、
どういう意味だろう?

他の国を助けると、信らける国になって、協力
などができるし、戦争も起こらないと思うから、
世界のためにもいいと思いました。

3. これからの自分にいかしたいこと

他の国の人と協力することは大切なことだと思
うので、外国の人と仲良くしたいです。

④前時：ワークシート

明日をつくる私たち 「こども環境白書」

11月17日(火) 5 年 名前

1. ESDとは?

毎日のくらしの中で、
「考え、学び、気づくこと」



2. ESDでめざす社会

今も将来も、幸せにくらせる社会

3. 「持続可能な開発」って何?

みんなが流しそうめんを食べ
れる社会をつくるのが「持続可
能な開発」。
人の気持ちも考える

4. 興味をもったこと・もっと知りたい・みんなに知らせたいこと

私は「今日からできる! 地球温暖化対策」と言うのが興味を
持ちました。
友達や家族とできること・一人でできること をこれからやっていき
たいです。
後、家族にも伝えたいです。

8 単元をととした児童の反応/変化

【モンゴルの暮らしについての児童の感想】

- ・スーティツアイはいい感じはしたけど、味がしっくりとこなかった。
- ・家の近くにスーパーがないし、コンビニもないし、水道もないのに、よく生きているなあ。
- ・小学生も馬をあやつって世話をしています。冬になると-30℃なんてビックリ。
- ・ゲルを自分たちで作っているのですごい。学校まで5～6時間もかかるから、学校に行きたくてもすぐに行けなくて、学校がたりないと知って驚いた。

【どうして日本はお金を出してモンゴルに学校を作ったのだろう? 児童の考え】

- ・日本は学校の作り方を知っているからかな。モンゴル人となかよくなるため。
- ・学校に行きたくてもも行けない人がいたから。モンゴルの人困っているから、日本人たちは助けてあげたいと思った。
- ・昔、モンゴルの人に何か世話になったから。



児童に提示した
パワーポイントの一部

【単元を通して】

5年生の子どもたちは4月から総合的な学習の時間に「米作り」を行い、12月に自分たちで育てたお米を販売した。そのお金の使い道について話し合った際、「みんなで分けておこづかいにしよう」「修学旅行のお金にしたい」という意見に加え、「少しは、学校に行けない子に募金しよう」という声が上がった。「募金」するにも、いろいろな組織があるので、どういう方面にお金を届けたいのか話し合った。児童会では、日本の障害者やお年寄り(赤い羽募金)への募金活動をしているので、5年生は、JIM—NET(代表:鎌田實 日本イラク医療支援ネットワーク)へ募金することを決めた。JIM—NETは、私が代表者の佐藤真紀さんに JICA のセミナーでお会いし、本当に活動されていることを実感したので、子どもたちに紹介したところ、子どもたちも興味を示してくれた。「人との出会い」が人を動かすと感じた。子どもたちの意識が、自分のことだけでなく、世界の子どもたちへも向き始めていることを感じた。

【単元のまとめ新聞づくり】(※新聞作成ソフト「スクール版子ども新聞編集長」株式会社筆まめ使用)

まとめに一人一枚ずつ、学んだこと・自分がやること・みんなに伝えたいこと等を、新聞にした。「外国の人ともなかよくする」「(南スーダンのことを考えて)肉やご飯を残さないで食べるようにする」「(地球温暖化を防ぐために)ゴミを出さないようにする」「学校に行けることはうれしいことで、平和なこと」「自分も困っている人の役に立つことをしたい」などと、書いている子が多かった。今後、校内をはじめ、保護者の方や、交流している学校の友達に配布したりして、広めていきたい。

H27年
12月20日
倭小学校

モンゴルと日本仲良く

ぼくは、大人になってもいろいろな人たちと協力して、いろいろな国の事を知って、けんかや戦争などおきないようにしたいです。日本の食料も買ってもらいたいし、食べ物をもたえる良い関係になり



モンゴルで活やくする日本人

井上さんは、落着くさん大学から来て、モンゴルの人と馬の病気のなおし方の研究について、ビックリしました。ぼくは、日本で研究をやれば良いと思っていただけど井上さんは「モンゴルを助けるといふことは、日本も世界も助かる」と聞いて、日本のことを考えてるし、世界の人の事も考えてると思えました。ぼくも、人の事を大事にしたいです。

もぎさんは南スーダンで学校をつくるとお伝えしていました。学校が家から七十kmの所にあると知ってビックリしました。スーダンの人は、給食に肉が入っていないから知っていているなんて知ってビックリしました。外国のことがわかって、よかったです。

南スーダンとエリトリア

榎本さんは、ブータンにいった美術の先生をやっていたそうです。榎本さんの家からヒマラヤ山脈の一つの山をとった写真がすごくきれいでした。ブータンは、二千年で暮らせる、と知ってビックリしました。ブータンの二田さつをもらいました。すごかったです。

H27年
12月20日

南スーダンに学校を作る

茂木さんは、南スーダンで学校を作るお手伝いをしていました。

南スーダンの子供は学校へ行けない子もいるけど、家の仕事を、一生懸命がんばっていて、すごいと思いました。



モンゴルでバレエを教える河村さん

河村さんは、モンゴルで、高校生にバレエを教えています。私は、バレエに、興味をもつて、休みの時間に友達といっしょに、楽しくやっています。

もし、河村さんにあつたら、バレエのジャンプを

河村さんは、モンゴルの子供たちと仲良く、楽しくバレーをやっていて、すごいとおもいました。これからも、がんばってほしいです。

外国のためにいっぱい考えて、いっぱいがんばって、すごいと思いたった。

これからも協力してがんばってほしいです。自分も、出来ることは、やっていきたいです。

青年海外協力隊

青年海外協力隊とは、自分の出来ることで、外国の人に、協力することです。

モンゴルで、バレエを教えている河村さん、障害のある子どものお世話をする吉田さん、ゴミのポイ捨てをやめる取り組みをしている横山さん、馬の病気の研究をしています。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

〔成果〕

- ・目の前の生活が中心で、意識しないと外国のことはほとんど考える機会がないが、世界の国々について思いをはせ、日本が行っている国際協力の意義について考え合うことができた。
- ・モンゴルでは定番のお茶(スーティーツァイ)を試飲した際、馴染みのない味に驚いた子がおり、それが環境からくる文化の違いだと感じる事ができた。
- ・子ども自身の経験から生まれた課題(疑問)や活動ではなく、私自身の体験を伝える中での授業展開であったが、JICA からの外部講師に、ブータン(青年海外協力隊)や南スーダン(NPO)での体験を子どもたちに話していただけたことで、さらに視野を広げ、国際協力を身近に感じ興味を持つことができた。やはり、人との出会い、関わりがとても大切だと感じた。

〔課題〕

- ・モンゴルで撮影した映像はとても効果的であったが、その場に行かないと環境の違いをイメージすることや実感を伴って感じることは難しい。よって、頭では理解しても、自ら行動を起こしたり、簡単に行動を変えたりすることは難しい。環境問題や発展途上国のことを、まずはよく知ることが大切であると感じた。

〔改善案〕

- ・今起きていることを「知る」ための一つとして、現在、子どもたちは毎週末の宿題として「興味を持った新聞記事をスクラップする活動(NIE)」を行っている。続けることで、様々な情報に触れ、何かを感じ、未来に向けて、考える機会を増やしていきたい。

10 教師海外研修に参加して

国際協力の現場を直接見る事ができ、私が実際に見たことや出会った人を教材にして、子どもたちと一緒に考えることができたことがよかった。様々な分野の活動に触れることができ、何を教材にするか悩んだが、子どもたちと一緒に考え、伝えたいことから考えていった。日本の海外援助は、私たちの税金で成り立っていることを思い、現地の方に喜ばれているのか等と考えを巡らす貴重な機会となった。「人」との出会いが、何より人を動かすと感じた。お互いに理解し合い、世界へと目を向け、少しでも広い視野で物事を考えられるようになることを願い、さらに実践を続けていきたい。



学校名：東京都立王子特別支援学校

氏名：加藤 佑圭

[担当教科：音楽]

- 実践教科等：社会・音楽
- 時間数：12 時間
- 対象生徒：高等部1年生
- 対象人数：58 人

1 単元名

モンゴルについて学ぶ

2 単元の目標

- ・モンゴルを通して、文化の違いを学び世界に興味をもつ。(多面的・総合的に考える力)
- ・モンゴル人の親日感情を学ぶことを通して、文化が異なっても互いを認め合うことで友好関係を築き、支え合えるということを知る。(つながりを尊重する態度)
- ・モンゴルを通して世界の飢餓について考え、食糧を大切にする態度を養う。(他者と協力する態度)
- ・モンゴルの音楽に興味をもち、自国と比較しながら伝統音楽や伝統楽器を理解する。(多面的・相互的に考える力)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本と他国の文化の違いを学ぶ。【多様性】
- ・国同士の友好関係や相互依存の関係を学ぶ。【相互性】【連携性】
- ・食糧難に直面している国があることを知り、食料を大切にすることができる。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

特別支援学校学習指導要領、社会には「外国の自然や人々の生活の様子、世界の出来事に関心をもつ。」「外国の自然や人々の生活の様子、世界の出来事について知る。」とねらいが記載されている。またその詳細においても、「世界の国々の自然や生活の様子を知ること、それらの国に住む人々の暮らしの様子、言語や文化の違いなどに気付いたり、それらの国の課題に興味・関心をもったりすること」や「外国と我が国の関係について考えたり、世界の国々が協力し合うことの大切さを指導すること」の重要性について記載がある。

本単元の対象生徒は、諸外国について学ぶ機会が無かった生徒が多く、本単元において身近な教員が訪れた国から日本と異なる文化を学ぶことは、外国に興味をもつきっかけになると考える。また、これらの機会は日本の文化を改めて学ぶことができるとともに、世界の諸問題についても興味を広げ、関心を高めることができると思う。

(2)生徒観

本学年は男子 36 名、女子 22 名(うち重度重複学級の生徒は男子 3 名)の計 58 名からなる。出身校は、特別支援学級から 34 名、特別支援学校(知的)から 22 名、肢体不自由校、通常学級から各 1 名である。障害の種別は、主障害である知的障害とともに、てんかん、自閉的傾向や情緒障害などの発達障害、ダウン症候群、麻痺などによる機能障害など、何らかの副障害を有する生徒が多い。障害の程度は東京都の療育手帳「愛の手帳」で見ると、4 度 27 名、3 度 14 名、2 度 15 名、未獲得 2 名、またそのうち心身障害手帳と重複して取得している生徒が 12 名いる。

学習前に本学年の生徒全員にアンケートを行った。モンゴルを「知っている」と答えた生徒は 13 名、「聞いたことがある」と答えた生徒は 5 名、「知らない」と答えた生徒は 30 名、未回答が 10 名だった。「知っている」と答えた生徒に、モンゴルについて訪ねると「馬頭琴・ゲル・相撲・朝青竜・中国の上でロシアの下」など多様な回答があった。しかし本学年は、高等部入学以降、諸外国について学ぶ機会が無く、半数以上の生徒がモンゴルについての知識が無い。また国外に興味を示す生徒もごく一

部だった。よって、本単元においてモンゴルを通して異文化について学ぶことで、生徒達に諸外国への興味を促し、さらにそれらの課題について考える機会を与えることができると考えた。

(3)指導観

本校の授業は学習能力別に ABC の3グループに分かれている。音楽の授業は音楽室でグループごとに、社会の授業はホールで本学年の生徒全員に一斉に行った。実態として集団授業が難しい A グループ 14 名においては、各クラスの教員にスライドに注目を促してもらったり、簡易な言葉に置き換えてもらったりするなど個別の支援をしてもらえるように配慮した。

知的障害の特徴の1つに、記憶しにくく忘却しやすいということが挙げられる。よって各授業の重点ポイントを2つに絞り、学習内容をシンプルにわかりやすく、何度も繰り返し伝えるようにした。特に愛の手帳3度と2度の生徒に関しては、言語による説明よりも写真やイラストで示したほうが伝わりやすい。よって説明時は、実物や写真、イラストや映像なども活用し、視覚的にわかりやすく、また言葉による説明を少なくするように努めた。さらに生徒から発言を求めるときは、2つの選択肢を示すことで自分の考えを表現できるようにした。

5 評価基準

観点	国外に対する 関心・意欲・態度	社会的事象への 思考・判断・表現	他国とコミュニケーションをとるための 技能	異文化や海外の諸 問題に関する知識・ 理解
評価規準	スライドや映像、授業者に注目しながら話を聞くことができる。	授業者の問いかけに自分なりに答えることができる。	モンゴル語で挨拶をすることができる。 (3時限目該当者のみ)	クイズや穴うめ問題が記載されたプリントを半分以上回答することができる。
評価方法	学習の様子	学習の様子 挙手や発言	発言	提出物

6 単元の構成

時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	「モンゴル」の学校について学ぶ 対象：学年全員	・モンゴルの学校を通して日本の無償資金協力と友好関係を知る。 ・モンゴル人の親日感情を学び、モンゴルへの興味・関心を高める。	・学校生活や家庭生活について自分たちと比較しながらモンゴルについて学ぶ。 ・モンゴル人の生徒たちが、日本へ憧れを抱いていた、日本の文化や言語について学んだりしていることを知る。
2	クラス対抗クイズ 対象：学年全員	・モンゴルと日本を比較しながら文化の違いについて学ぶ。 ・文化に違いがある国同士も互いを学び合うことで親しくなれることを学ぶ。	・2択のクイズを通して、日本とモンゴルを比較しながら、文化の違いと似ているところを学ぶ。 ・プリントで授業内容について復習するとともに、モンゴルを学ぶ前と授業後の、モンゴルに対するイメージの違いをまとめる。
3	モンゴル人と電話をする 対象：学年全員	・モンゴル人にモンゴル語で挨拶や質問をする。 ・自分の言葉をモンゴル語に通訳してもらった経験をする。	・JICAモンゴル事務所と本校をスカイプで繋ぎ、通訳のツェンさんやドライバーのアムラーさんに対して、生徒達から直接挨拶や質問をする。 ・出演してくれたお礼に校歌を歌う。

4 5	飢餓について学ぶ 対象：学年全員	・モンゴルのウェイトピッカーから、同年代の子供が食糧難で苦しんでいる現状について理解する。 ・食に恵まれている日本の現状を再認識し、食べ物を残さないようにすることができる。	・対象生徒と同年代の子供が、学校に行けず毎日ゴミの山から鉄を拾う仕事をしている現状とその理由を写真から考える。(フォトランゲージ) ・プリントを通して飢餓について復習するとともに、食べ物を無駄にしている現状について自分なりの考えをまとめる。
6	馬頭琴について学ぶ 対象：b・cグループ	・馬頭琴と三味線を比較することで、馬頭琴の構造について理解する。	・モンゴルにおいて撮影してきた映像を鑑賞し、プリントの穴埋めをしながら馬頭琴の特徴について学ぶ。 ・以前に授業で学んだ日本の三味線と比較する。
7 8	ホーミー・オルティンドーについて学ぶ 対象：b・cグループ	・ホーミーの演奏方法を理解する。 ・オルティンドーと日本の長唄の比較して、音楽における文化の違いと共通点を理解する。	・モンゴルにおいて撮影してきた映像を鑑賞し、発声方法を真似るなどしながら学ぶ。 ・日本の長唄の映像も鑑賞し、モンゴルと比較する。
9 10	モンゴルの伝統楽器について学ぶ 対象：b・cグループ	・モンゴル琴やヨーチン、コンーションなどについて学び、日本の伝統楽器や伝統音楽との相違点や共通点を理解する。	・モンゴルにおいて撮影してきた映像を鑑賞し、プリントの2択クイズに答え、日本の楽器とモンゴルの楽器を比較しながら学ぶ。
11 12	モンゴルの伝統音楽を鑑賞する 対象：aグループ	・モンゴルの伝統音楽を静かに聴く。	・暗転した部屋で寝そべり、モンゴルの伝統音楽を静かに鑑賞する。

7 授業事例の紹介

小単元名【 飢餓について学ぶ 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月26日(月)第2限

(イ)実施会場 ホール

(ウ)本時の目標

- ・開発途上国における飢餓について理解する。
- ・自分たちが日常的に無意識に食糧を廃棄している現状に気が付き、食事を残さずに食べようと思えることができる。

(エ)指導のポイント

- ・ウランバートルの様子を中心に、モンゴルの文化や人々の暮らしについて学んでからウェイトピッカーについて学ぶことで、目覚しく発展するモンゴルの現状を正しく理解できるようにした。
- ・ウェイトピッカーの概要を対象生徒と同年の男子の暮らしを通して学ぶことで、自分と比較してもらい問題意識を高めた。
- ・「貧しい＝お金が無い＝食べ物が無い」と飢餓について簡易化して伝え、わかりやすくした。
- ・食べ物を無駄にしないことは飢餓で苦しむ途上国の支援に直接関係が無い。しかし世界の飢餓問題を理解するだけでなく、それらを学んだことによる行動変容もねらいたいと考えた。よって本校の1ヵ月分の給食残量を提示し、いかに意識せずに食糧を捨てているのかを自覚できるようにした。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
2限	パワーポイントを操作しながら説明をする。	「復習クイズ」 映像や写真を見ながら、2択のクイズに答える。1番なら片腕、2番なら両腕を挙げて答える。 「言葉の復習」 全授業において繰り返し学習してきた「文化の違い」と「親日」の意味について復習する。 「16歳のバトル君」 ウェイトピッカーの暮らしについて学ぶ。 「飢餓について学ぶ」 お金がない→貧しい→食べ物がない→やせ細る→病気になって死ぬという流れを学ぶ。 「9月の給食の残飯」 1ヶ月で130kgの残飯を捨てている現状を知る。 「ハゲワシと少女」 写真が示すことについて考える。	学年全体を対象にホールで実施	各担任は、スライドへの注目が難しい生徒に対して言葉かけや指さしなど行い参加を促す。 写真や映像を提示したり、ヒントとを伝えたりして、生徒が自分なりの答えを出せるように支援をする。 同年齢の子供を通して学ぶことで、自分の暮らしと比較できるようにする。フォトランゲージも使用する。 クイズを交えながら飢餓の内容を簡易に示し、理解しやすくする。 実際の残飯が入ったバケツなどの写真も提示し牛乳パック130本と比較するなどして量を示す 説明を加えながらフォトランゲージを使用し、生徒が自分で考えられるように支援する。 スライドで学習したことで全く同様の内容をプリントに書き出すことで、聞いたことを再度考え、確認できるようにする。	【国外に対する関心・意欲・態度】スライドや映像、授業者に注目しながら話を聞くことができたか。 【社会的事象への思考・判断・表現】選択肢の番号を表すなどして自分の考えを示すことができたか。
3限	スーテーツアイとプリントを配る。	「まとめのプリント」 スライドの内容をプリントで復習し、飢餓に対する自分の考えをまとめる。 「スーテーツアイ」 スーテーツアイを試飲し、モンゴルの代表的な飲み物の味を知る。	各クラスで各担任が進行する		【異文化や海外の諸問題に関する知識・理解】クイズや穴うめ問題が記載されたプリントを半分以上解答することができたか。

(2)授業の振り返り

・復習クイズに関しては、約7割以上の生徒が正解することができていた。また2択にしたことや、選択

肢に写真やイラストを使用したことで、発語や読字が難しい生徒においても回答することができていた。

- ・言葉の復習に関しては、全授業で繰り返し行ったことで約5割の生徒が正しく答えることができた。
- ・飢餓の説明を簡易化しクイズを交えたことで、約6割以上の生徒がまとめのプリントにおいて飢餓について正しく答えることができた。
- ・ウェイトピッカーについては、対象生徒と同年齢の架空人物について説明することで自分の境遇と比較しながら学ぶことができていた生徒もいた。
- ・給食の残量を写真や天秤のイラストなどを交えて具体的に示したことで、自分たちがいかに意識せずに食料を捨てているのかを気づいてもらうことができた。
- ・復習プリントにおいて「食べられる物を捨てていいのでしょうか？」の問いに対して、飢餓を理解した上で自分が食料を捨てている現実を振り返り、反省している生徒が12名見られるなど、生徒の行動変容に繋がる授業ができた。

(3) 使用教材



(4) 参考資料等

ケビン・カーター/「ハゲワシと少女」<www.geocities.jp/kiharasi/11-hagewasi.html> (2015 年 10 月 24 日)

『学校に行きたい 国際協力とわたしたち』JICA2014年10月改訂第四版

8 単元をととした生徒の反応/変化

- ・1時限目「モンゴルの学校について学ぶ」を通して 復習プリントより抜粋

「モンゴルの人たちは日本のことを知っているのに、日本の人たちはモンゴルのことをあまり知らない人が多いので、少しずつ知っていこうかなと思った。」

「モンゴルはすごいなと思った。」

「モンゴルの学校と日本の学校の違いがびっくりした。」

⇒モンゴルを知らなかった生徒も、身近な教員が夏休みに行ってきた国として学びを深めるうち、モンゴル人の親日感情や文化の違いから興味・関心が高まり、様々な質問をするようになった。特にお金や言葉、食べ物などの違いに興味をもち、違いを楽しんでいる生徒が多かった。

- ・4時限目「飢餓について学ぶ」を通して 復習プリントより抜粋

「貧しい人達は食べ物を食べられないのに、自分達は食べ物が食べられるのは当たり前だと思っているから残してしまうので、食べ物が食べられない人がいる。感謝をすること忘れずにちゃんと食べた方がいいと思う。」

「私達日本人は食べ物があります。でも食べられなくて子どもが死んでしまう国もあると学びました。」

なので食べ物を残さないようにしたいです。」

「この世界には食べられない人がいるのに日本国民は食べ物を絶対捨ててはいけない！」

「世界には食べ物が無い人が沢山いる。だから食べ物を食べられるというのはとてもありがたいこと。それらのに嫌いな物や苦手な物だからといって捨てるのはよくない。食べ物を食べられない人の気持ちになってごはんを残さず食べるのが一番いいことだと思います。」

⇒飢餓という状況とそのような国があるということを理解し、自分たちが食べ物を無意識に大量に捨てている事実を認識して反省する様子が見られた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

～この授業を行うまで～

派遣前、私が日頃から関心が高い「飢餓」の問題に関しては、モンゴルをきっかけに授業を行いたいと考えていた。海外派遣中、モンゴルの文化を学び、親日の生徒達と出会い、モンゴルに対して親しみを感じるようになった。それらの経験から本校の生徒においても、他国の文化や世界の諸問題を理解するだけでなく、他国を親しむ気持ちを育みたいと考えるようになった。また、日本と異なる文化や考え方に対して優劣をつけるのではなく、違いを楽しみ尊重する気持ちも育みたいと強く感じるようになった。

～PDCA サイクルについて～

「Plan」

「生徒たちが飢餓について学びを深めるとともに、自分たちが日常的に大量の食糧を捨てている現状に気が付き、食事を残さずに食べようと思えることができる。」をねらいに授業を計画した。

「Do」

スライドで写真やイラストなどを使用しわかりやすく示した。クイズやフォトランゲージなども行い自分なりに考えられるようにした。

「Check」

テスト形式のプリントから生徒の理解度を確認した。C グループの生徒は9割以上、B グループの生徒は5～6割の正答率だった。

「Action」

今後より学びを深めるためには、生徒の実態に合わせ、学習能力別のグループごとに授業を展開する必要があると考える。C グループについては飢餓の現状をより詳しく、そしてそれらの国に対して自分たちはどのような支援ができるのかを考えてほしい。B グループについては、今回の内容を繰り返し扱い、全生徒が理解できるようにしたい。A グループについては、モンゴルの伝統音楽や文化を紹介した写真と「モンゴル」という言葉が一致できるようになることをねらいとし、シンプルな内容の授業を繰り返し行いたいと考える。

10 教師海外研修に参加して

私は日頃、高等部にて半数以上を占める軽度知的障害の生徒たちは、社会に支援されるだけでなく、国際協力活動において支援者になることができると感じていた。また開発途上国へのボランティア活動などが、生徒たちの自尊感情を高め、卒業後の有意義な生活の一助になるのではないかと考えていた。しかし彼らは世界の諸問題に関して学ぶ機会が非常に少ない。よって音楽専科の私がこれらの授業を扱うきっかけがほしいと考え、今回の研修に参加した。私は本研修を通してモンゴルについて多面的に学び、様々な人々に出会い、異文化を体で感じたことで、モンゴルについて非常に親しみを感じるようになった。また現役の青年海外協力隊の方々からの話から、異なる文化や考え方の優劣をつけず、ありのままを受け入れて尊重し、共に成長する大切さと相互依存の世界のありかたを改めて痛感した。

今世、世界情勢の不安定さや東京オリンピックを迎えるにあたり、私は「真の国際理解教育」、つまり他国の知識を学ぶだけでなく、異文化や国境の壁を乗り越えて互いを思い合える心を育む国際教育が重要になっていると考える。よって今後は本校の生徒においても、モンゴルの生徒たちと同様、異文化を受け入れ尊重する態度も育んでいきたい。そのためにも他国の文化や歴史を学ぶだけにとどまらず、文通やスカイプなどを通じた生徒同士の交流を取り入れていきたい。さらに、開発途上国支援のチャリティ活動などを継続的に授業に取り入れ、卒業後も生徒たちが自ら国際協力に関わろうとする気持ちと、それらを可能にする環境作りに取り組んでいきたいと考えている。